

2012 年 切手カレンダー 屏風と切手





1995 年国際文通週間記念



重要文化財
指定名称：紙本着色月次風俗図
8曲1隻 紙本着色 67.3 × 41.8
室町時代・16世紀
東京国立博物館

公卿から庶民に及ぶ各層の月次の風俗を描く八図を貼り付けた小屏風。平安時代に盛行した大和絵の古典的ジャンルである月次絵の伝統をひくものであるが、人物の労働や遊樂の有様に強い関心が注がれ、近世初期風俗画の成立につながる傾向を感じさせる。東京国立博物館

2012年

1 月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				



1962 切手趣味週間記念紙本
著色花下遊楽図

国宝 指定名称: 紙本著色花下遊楽図
狩野長信筆 6曲1双 紙本着色
各 148.6 × 355.8 安土桃山～江戸時
代・17世紀 東京国立博物館

右隻は、満開の八重桜の下で貴婦人を中心に酒宴が繰り広げられるさまを、左隻は、花咲く海棠の木の下で八角堂に坐り、風流踊りを眺める貴公子の一団を描く。特に、美しい衣裳を着て腰をひねって踊る姿態は印象的である。刀をもって踊る左隻右側の4人の姿は、流行の阿国歌舞伎を写したものとみられる。

人物は画面に対して相当大きく表され、爛漫の春を楽しむ人びとの姿そのものに、画家の興味が向けられている。こうした人物への関心が、やがて寛永期の優れた風俗画に引き継がれていく。

背景には、当時一般的であった金碧を用いず水墨画の技法を生かしていること、両端に巨樹を配して構図を整えていることなど、表現はむしろ古様である。作者は、印章によって、狩野永徳の末弟、長信（1577－1654）と知られ、制作年代は不明であるが、慶長末年から元和初年（1610年代）とする説もある。もと、明治の実業家原六郎の所蔵であったが、修理の最中に関東大震災に見舞われ、右隻中央の2扇が焼失した。東京国立博物館

2012年

2月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29			





源氏物語関屋濡標図屏風



1978年国宝シリーズ 第2次

2012年

3月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31



国宝 152 × 354.5 六曲一双 依屋宗達筆 静嘉堂文庫美術館所蔵

関屋図と濡標図（みおつくしず）に別れ、ともに源氏物語から取材したものである。関屋図は、鮮やかな緑の山々が重なり合っている背景のもと、逢坂の関の柵の前に光源氏の乗った牛車が描かれている。いかにもグイッと引っ張っているぞという様の牛の力強さが印象的だ。左端には、空蟬が乗っている牛車が半分だけ描かれている。濡標図は、白砂青松の浜辺に、やはり光源氏の乗った牛車が描かれている。左端に住吉大社の反り橋が見える。沖には明石上に乗っているであろう船が浮かんでいる。それぞれ、山と海を場面設定している。静嘉堂文庫美術館



花鳥図屏風



1977 年国際文通週間記念

2012年

4 月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

紙本着色花鳥図〈長谷川信春筆／六曲屏風〉

149.5 × 360.0cm

重要文化財

紙本着色 桃山時代初期

妙覚寺蔵（岡山市）

従来等伯の子久蔵と同人であるとされてきた長谷川信春は、近時研究が進むにつれて、等伯の前身であるという説が脚光をあびているが、信春すなわち等伯を確認する史料は出現していない現状である。信春の他の作例に比べて、本屏風は様式的には等伯に密着する感が深く、同人説をとれば、信春と称した時期の終り頃の制作であろう。印章も諸作が信春袋印を押すのに比べ、「長谷川」の長方印と「信春」の鼎印【ていいん】を押している点に異色がある。等伯云々はさておき、本屏風は、長谷川派花鳥画のうちに屈指の優作というべきであろう



羊木葛纈屏風



2003 年切手趣味週間記念

正倉院宝物



1960 年奈良遷都 1250 年記念

2012年

5 月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

長 149.5 幅 56.5

本地長 125.1 幅 49.5

材質・技法： 夾纈染 仮表装
国家珍宝帳記載品。夾み染めの
染織屏風。今日、麟鹿草木屏風
は失われ、鹿草木の図様の 1 扇
をそれにあてている。

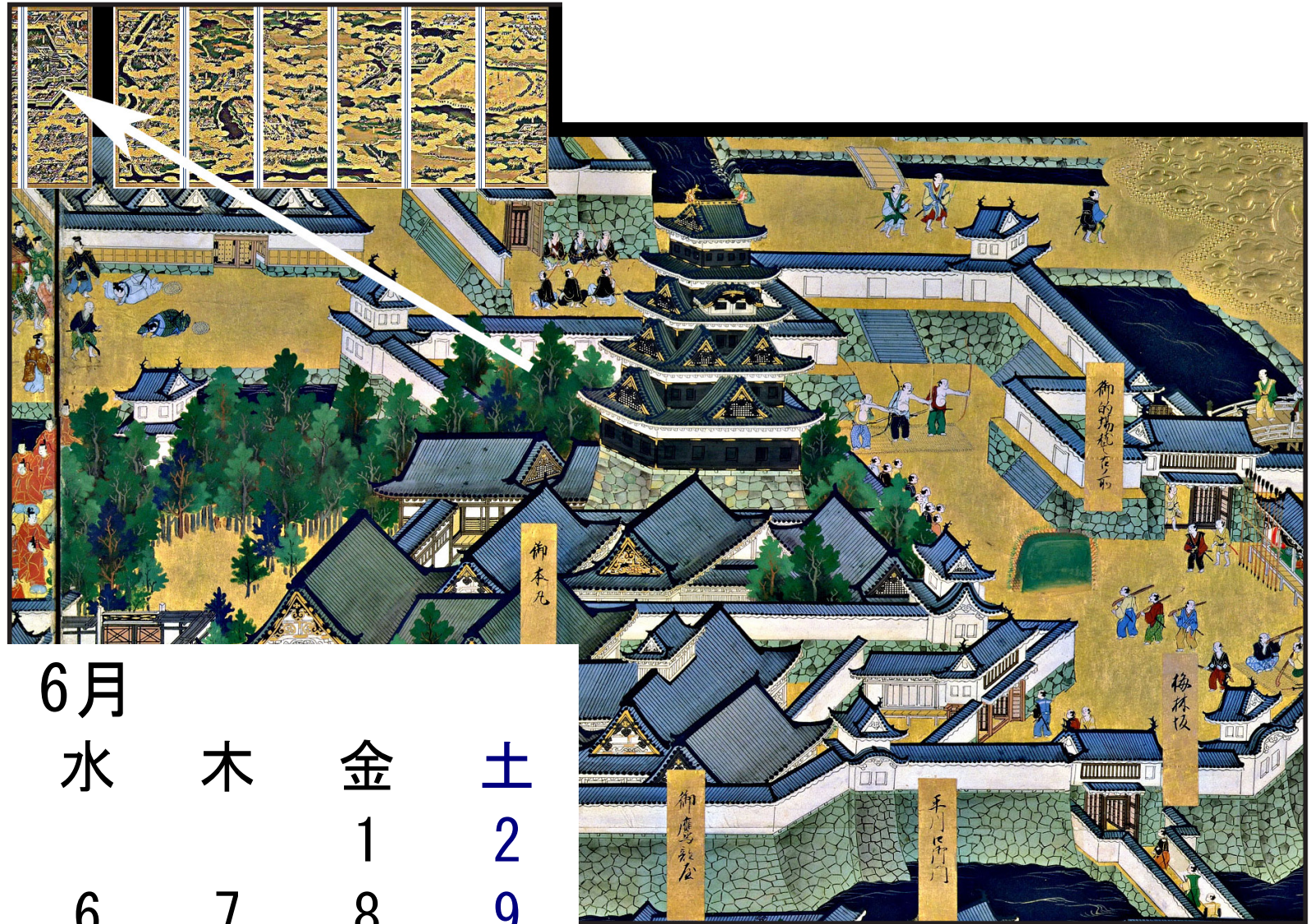
切手は右の屏風部分を合成



麟鹿草木夾纈屏風
(りんろくくさききょうけちのびょうぶ)



江戸開府 400 年記念



江戸図屏風

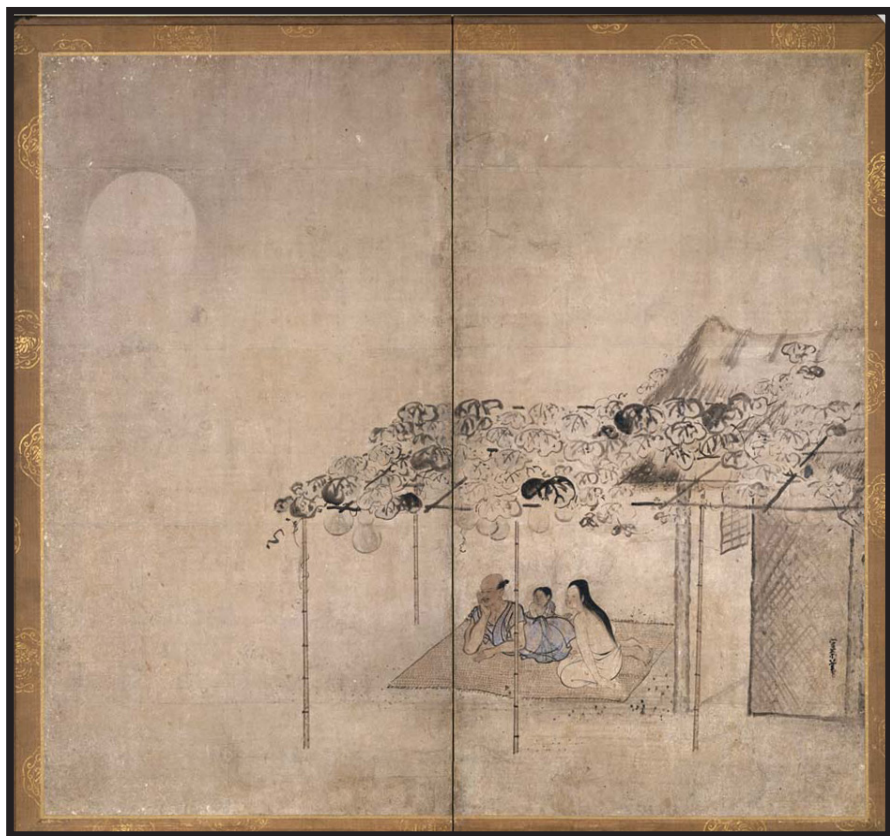
六曲二双 江戸城天守 (左隻 1 の中上部分)

屏風には、家光の盛時を示す意図から江戸城天守が大きく描き込まれている。この天守は江戸城としては3度目のものとして、寛永15年(1638)に完成した。基壇から上端までの高さは、約60㍎に及んだ。しかし、明暦3年(1657)の大火の折に焼失し、以後再建されることはなかった。国立歴史民俗博物館所蔵

2012年

6月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30



1978 年国宝シリーズ

納涼図屏風

2 曲 1 隻 紙本墨画淡彩 久隅守景筆（くすみもりかげひつ）

縦 149.7 横 166.2 江戸時代 17 世紀

国宝 東京国立博物館

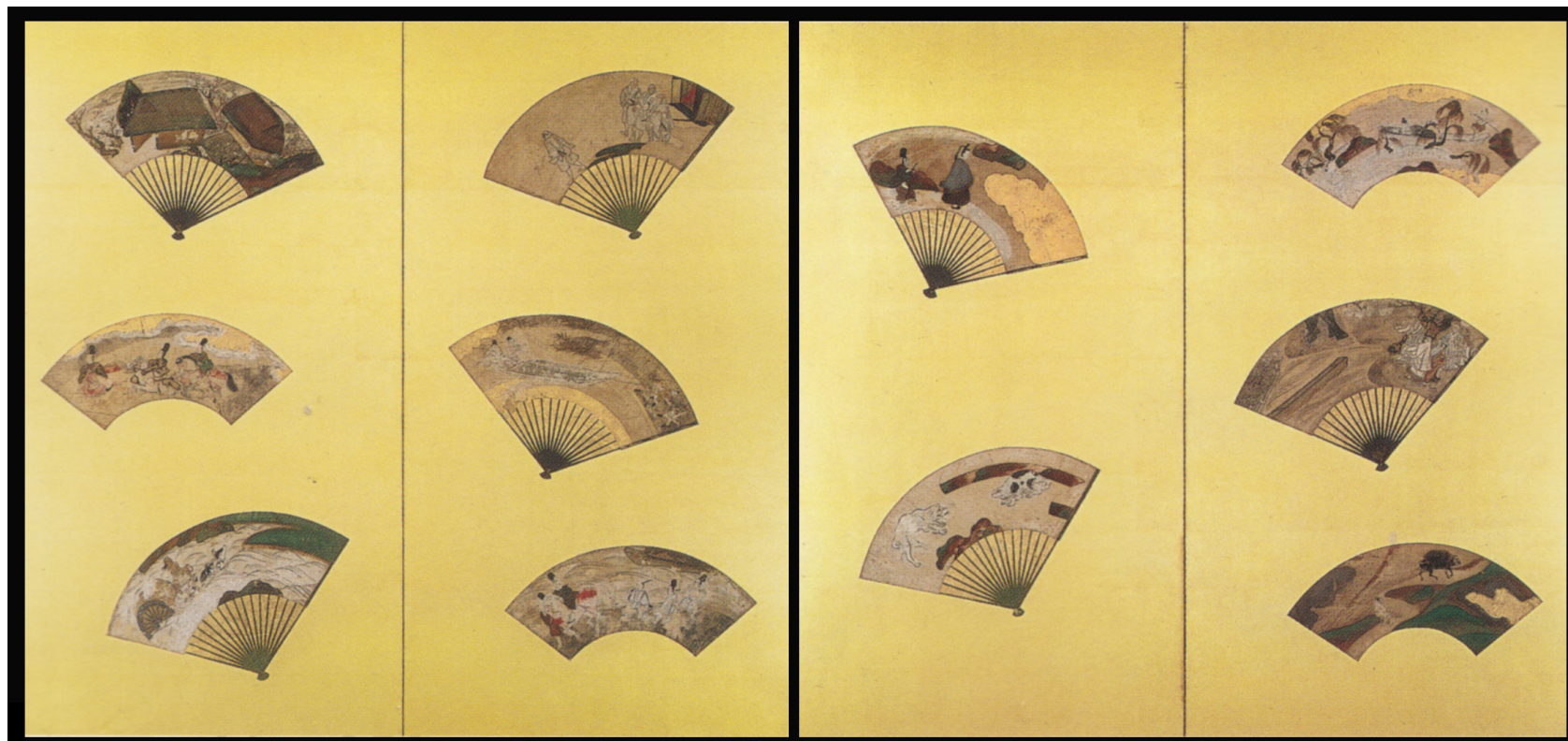
左上の大きな白い満月が、おぼろげにあたりの闇をも引き込んで、夕顔棚の風景と柔らかい白黒の対比を醸し出すのが、いかにも清新な趣である。月、夕顔、男、女、子供、竹棒、屋根、壁と、どれも異なる筆使いながら、一つに溶けあうように優しいのは、あくまで夕闇を意識した淡墨を基調としているからだだろう。詩情豊かなこの画の主題は、木下長嘯子の和歌らしい。「夕顔のさける軒端の下涼み男はててれ（襦袢）女はふたの物（腰巻）」

東京国立博物館

2012年

7月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				



扇面散貼付屏風 牛追図

二曲一双

俵屋宗達

重要文化財 醍醐寺

2012年

8月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	



1974 年万国郵便連合 100 年記念



夏秋草図屏風



1970 年万国博覧会記念 (第 2 次)

2012年

9月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

2 曲 1 双 紙本銀地着色 酒井抱一筆

各縦 166.9 横 184.0 江戸時代 19 世紀

重文 東京国立博物館

銀地に、驟雨に見舞われた夏草と、強風に靡く秋草を描いた抱一の最高傑作。夏草図には急な雨による水の流れを、秋草図には宙に舞う蔦の紅葉を描き添える。宗達の風神雷神図を模写した光琳の屏風の裏面に描いたもので、琳派の系譜を象徴的に表した作例といえる。近年、この図の下絵が発見され、貼紙より一橋家の注文により抱一が文政 4 年（1821）に描いたことがほぼ確実となった。

東京国立博物館



1974 年列国議会同盟会議記念



同時発行記念切手

2012年

10月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			



川端龍子「愛染」2曲屏風1双 絹本着色 176.3cm×177.3cm 足立美術館蔵

こまやかな夫婦の愛情を表現しています。群青の池と深紅の紅葉、その中でつがいのおしどりが見つめあう一瞬。装飾性と写実性がみごとに調和した名作です。

川端龍子：明治18年（1885）～昭和41年（1966）

和歌山市の呉服商「俵屋」の長男として生まれる。18歳の時、読売新聞の挿絵募集に入選。油絵を学びながら、しばらく挿絵の仕事が続ける。大正12年に渡米し、ボストン美術館で見た日本美術に感銘を受け、帰国後は日本画に転向。



1963 年切手趣味週間記念

2012年

11月

本田平八郎姿絵屏風

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

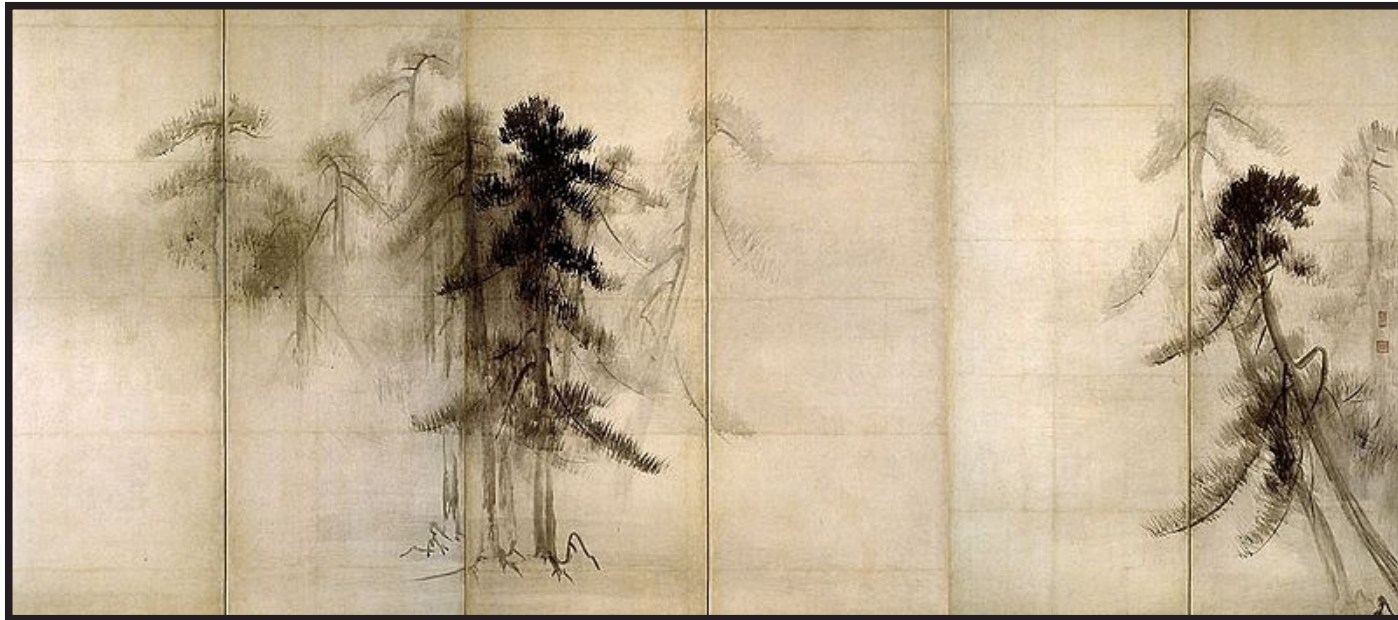
江戸／17世紀

縦 72.2 横 157.4

二曲一隻

重文 徳川美術館蔵

向かって右には、葵紋を散らした鹿の子絞りの小袖を着た女性が侍女に手紙を読ませる様子、左には若侍と、菊の花束を片手に以て結び文を手渡そうとする禿とが描かれる。右扇の美女を千姫、左扇の若衆を本多平八郎忠刻とみて、両者の出会いを表したとする伝承が古くからあるが、実は二人のロマンスに仮託した附会で、風俗画の主題の一つ「文使い図」と考えられる。背景を省略して人物を大きく扱い、その衣装美や姿態美に重点が置かれた本図は、井伊家伝来の「彦根屏風」とともに江戸初期風俗画中の名品に数えられる。 徳川美術館



1969 年国宝シリーズ

2012年 12月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					



松林図屏風

6 曲 1 双 紙本墨画 長谷川等伯筆 各縦 156.8 横 356.0

安土桃山時代 16 世紀

国宝 東京国立博物館蔵

草稿ともいわれるが、霧に包まれて見え隠れする松林のなにげない風情を、粗速の筆で大胆に描きながら、観る者にとって禅の境地とも、わびの境地とも受けとれる閑静で奥深い表現をなし得た。等伯（1539-1610）の画技には測り知れないものがある。彼が私淑した南宋時代の画僧牧谿の、自然に忠実たろうとする態度が、日本において反映された希有の例であり、近世水墨画の最高傑作とされる所以である。東京国立博物館